



TITLE:

南米日食観測行(3):トルヒーヨより

AUTHOR(S):

Σ

CITATION:

Σ. 南米日食観測行(3):トルヒーヨより. 天界 1937, 17(197): 416-421

ISSUE DATE:

1937-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167533>

RIGHT:

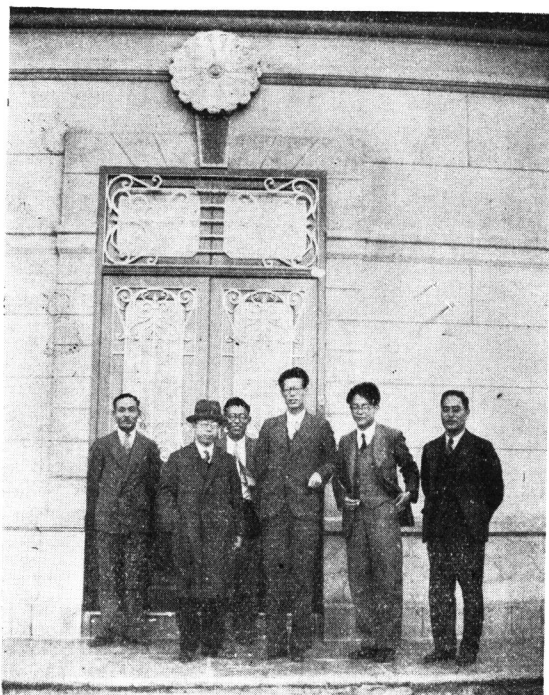
南米日食観測行 (3)

〔トルヒヨより〕

⑦ 赤道越えて

5月15日朝パナマ國バルボア着。所謂パナマ運河の太平洋岸を横目に睨らんで、其の直ぐ脇の棧橋に横づけになつた。其の時1萬トン級の何處かの客船が恰も蛇に飲まれる蛙の如く次第々々に運河の中に消えて行つた。其の横

では河口を守るアメリカの砲臺が樹木の間より靜かに睨下して居た。バルボア、パナマ間自動車で約20分。我々はパナマ市の電車通りを行きつ戻りつ、とにかくパナマと云ふ街を印象づけるべく歩き廻つた。船の出航迄の短い時間を利用し、パナマ市郊外の古城を眺めて數百年前のモンガンの戦の跡を偲んだ。16時バルボア出港。船は更に南へ南へと下つて



(観測隊宿舍たる日本名譽領事ドン・カルロス氏邸宅の玄関にて (左より2人目山本博士、1人おいて柴田理學士、堀井理學士))

行く。日に日に低くなるボラリスに忍へ難い愛着を感じながら、5月17日14時半我々の船は遂に赤道を超えた。そして5月18日夕暮エクワドル國ガヤキール港に碇泊した。此處でも我々は上陸し、所謂パナマ帽の原産地たる此

の國の港を見物した。貨物船は荷上げが済めば直ちに出る。我々は同夜22時再び船客となつて更に南下した。そして次に碇泊した所こそ、我々の目的地たるペル1の港であつたのである。

⑧ ペル1に来て

日本を出て45日。アメリカ合衆國、メキシコ、ニカラグア、コスタリカ、パナマ、エクアドルと其の間、明けては海暮れては海、随分長かつた。けれども旅路恙なく待てば海路の日和とやら、我々は漸く5月20日16時ペル1國のサラベリ1と云ふ小さい港に上陸出来たのである。其處からトルヒ1ヨ (Trujillo) 市迄自動車で30分。我々の宿舎はトルヒ1ヨの日本名譽領事ドン・カルロスと云ふ人の邸宅となつた。

トルヒ1ヨと云ふ町はペル1の首府リマ市の北東500キロ、海岸に近く存在するペル1第4の市街であつて、人口3萬、リベルタ州の縣廳の所在地である。此の地には又日本人が約300人住んで盛に活動されて居る。我々の今回の日食觀測にも一方ならぬ御世話に預かり、觀測準備は勿論の事、日常生活に至る迄全く獻身的の御援助を戴いて居る。米、お茶は勿論の事、味噌がある、奈良漬がある、昆布巻がある、餅がある、壽司がある、松茸、栗、豆、たけのこ等が食卓の上にズラリと並らび、茶碗と箸を使つて食事が出来るので日本に居るのと何の變りもない。

此の地は南緯8度半、赤道に近い割に意外に涼しい。もつとも目下秋の季節であつて比較的涼しい方には違ひないが、毎日合服で丁度いい。夜の觀測にはどうかするとオ1バ1が愾しい位だ。併し、太陽光線の強さはさすがに強く寫眞を撮るのに餘程手加減が要る。

年中殆んど雨の降らない所と云へば一面の沙漠を聯想する。此の地もやはり一面の沙漠で見渡す限り樹木が一本もない。山峰は峨々として聳え、谷は斷涯を作り、平野は一面の砂つ原である。アンデス山脈が遠く東の地平線につき立つて、焼きつく様な陽の光がキラリキラリと砂地に踊る様は、恰かも月世界に來た様な氣がする。

⑨ 觀 測 地

トルヒ1ヨ市の北東約10キロ、自働車が沙漠の中を走る事約25分にしてワ

ンチャコ (Huanchaco) と稱する村に達する。海邊に沿つて土でこね上げて、白く赤く塗りつぶした化物屋敷の様な家がボツチリと並ぶ此の村はづれに、此れは又馬鹿に廣い白壁の家がある。大きな室だけでも10以上あらうが、所々屋根は落ち壁は崩れ、狸か狐か一つ目小僧の住みさうな家であるが（併し寫眞に撮ると案外美しく映る）此處が我々の観測所と決められた。そうして我々だけでなく、お膝元のペル1國の観測隊及び合衆國の1隊（フィシャ1氏一行）も此の化物屋敷で観測することとなつた。此の家は今では勿論人が住んで居ないので埃が積もり放題、我々が到着した翌日、早速大急ぎで大掃除をし、同時に10米コロナグラフのためのコンクリ1ト臺、経緯度観測用の



（トルヒーヨ市外ワンチャコ港ラルコ館）
（日本・ペル1兩國観測隊の本營）

コンクリ1ト臺、ペル1観測隊のためのコンクリ1ト臺等の建設に取りかゝつた。毎日御飯時にはトルヒーヨまでわざわざ歸つて居たが5月26日より観測所にて食事を取る様にし、大急ぎで準備にかゝる。日食時の太陽の高度が低いので機械全部を屋内に置き窓を開いて日食を見る様にした。廊下の一部を利用して10米コロナグラフの筒を据えたが、さて玄關をはいつ

て機械が何處にあるのか解らない程此の家は廣い。本日（6月3日）で、もつて、10米コロナグラフのセツティングは完了し、後は僅かな調節の残されて居るばかりになつた。山本教授擔當の活動寫眞の方も、晝夜兼行で完了を急ぎ、ほぼ完了する事が出来た。本日より日食の豫行演習にとりかゝる。下に我々の観測プログラムの中主なるものを示せば、

- (1) 接觸時間測定 活動寫眞及び 75cm 望遠鏡にて
- (2) 内部コロナ寫眞 10米コロナグラフにて
- (3) 第2接觸に於けるフラッシュ・スペクトラム 活動寫眞にて
- (4) 皆既中の明るさ測定 活動寫眞にて

(5) コロナ・スペクトラム

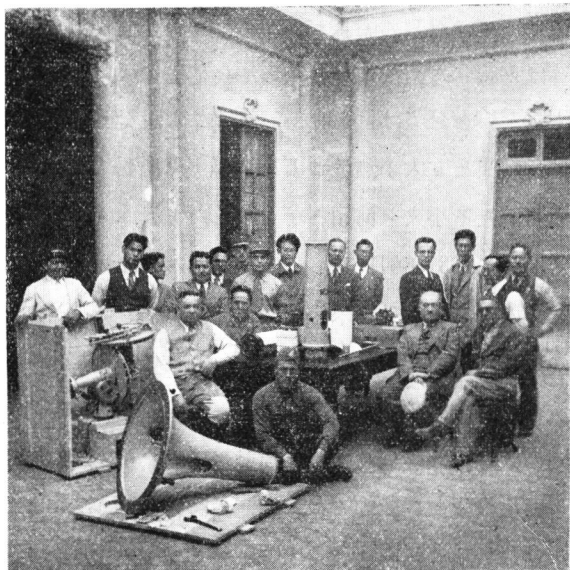
活動写真にて

(6) コロナ外観写真

活動写真にて

経緯度の観測は、曇天に妨げられて幾分長引いたが、もう1日2日で全く終了する。

ペル1観測隊のプログラムは、ツアイス製13糎 (f. 15) の眼視望遠鏡にて日食の眼視観測及び接觸時の測定、5糎 (f. 6) の写真レンズにて外部コロナの撮影を主とし、其の他一般的氣象観測を行ふ。13糎望遠鏡のためには高さ4米のコンクリート臺を作つたので、半永久的の立派な観測所が出来上つた。



(ペル1観測隊の口径13センチ赤道儀組み立て中)

アメリカ合衆國観測隊のプログラムについては目下詳しく解らない。

とにかく一軒の家に日獨米3國の観測隊が同居し、^レレイ・イチ、^{レイ}・ニ⁷と^セロ・ウノ、^セロ・ドス⁷と^レゼロ・ソン、^ゼロ・ツ一⁷とが同時に響く事になつた。正面立關には日獨米3國旗が南風に翻つて戦は今や目前に迫る。食ふか食はれるか、運命の鍵は今誰が手許にあるのであらう。

(トルヒ1ヨにて、6月3日。2生)

 [再びパナマより]

⑩ 南米にインカの神の姿を見る

其の昔、今を去る數百年前迄、南米アンデス山脈の高峰には、インカ (Inca) 民族と稱する文明人が繁榮を極めて居た。太陽を其の神とし、或はクスコ (Cuzco) に或はチャンチャン (Chanchan) に城を築き運河を堀り、所謂インカ帝國を其の地に敷いて、南アメリカの支配者として君臨して居た。其の頃の話である。何時の日にか月の蔭が此の地に上陸し、海岸の沙丘を越え、高峰の頂きを過ぎ、アマゾンの蜜林を通つて、又遙か海洋の彼方に消えた事があつた。彼等は勿論其の何たるかを知らず、徒らに天に祈り地に平伏し、刻々虧け行く太陽を仰ぎ見ては世を呪ひ、果ては太陽を蝕ばむは犬の仕業なりと、犬小屋に駈け集まり大小無數の犬を引きずり出して大木に結び、鞭を持つて犬を打ち可憐なる小犬を何頭となく殺したと云ふ——話は話として今に傳はつて居る。去る1937年6月8日、神はインカの夢を思ひ起せと南米の世を再び闇暗にしたのである。數日來曇天、又曇天のワンチャコ (Huanchaco) の空は、當日の13時になつて俄然晴れ出した。心持よい南風に追はれて密雲は北へ北へと流れ去り、雲量 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1, そして 0, 時正に15時、紺碧の空に南國の太陽は、強烈な光線を輻射して戰を挑んで居る。16時20分、一點の黒彩と共に太陽に角が立つや否や、我々の身體からは、より強烈な神經の波が全宇宙に放射し、虧け行く太陽を追つて定時定刻定められた太陽の面影を一つ一つ且急に乾板の上に映し取つて行つた。かくして17時18分、明瞭な Shadowband の飛來と共に南米の海上には、とても鮮やかなコロナの姿が浮び出たのである。Maximum Type か Medium Type か? そして Prominence も見えたであらう! 又星も出たであらう! 宇宙は今インカの昔に歸つて居る。併し太陽を射る者——我々の前には空もなく、海もなく、將又インカのそれも意識せず、唯或る強い力の命するまゝに、此の嚴かな神の姿の魂を1枚1枚刻印して行くに過ぎなかつた。やがて時は過ぎ月は去り、世は蘇がへつて陽は出で、西に傾いた日輪の刻一刻、丸い影を宿すのを望み見た時、

我々は遙かアンデスの山奥より數千萬人のインカの歡聲を聞いた様な氣がした。そして沈み行く太陽の遙か彼方の水平線に日本の國を見、そして誰々の懐かしい顔々々が、日の表に重映するのをはつきり見る事が出來た。かくして皆既8枚部分食4枚都合12枚の太陽を風呂敷に包んで、宿舎に駆け歸へり其の夜直ちに現像し、再び當時を思ひ出してから、我々は改めてほんとうの祝盃を擧げることが出來たのである。

母國を離れて數千里、赤道に頂くアンデスの雪と、それを裏づけるインカの聲と、そして其れ等一切を遠く引き離れた天上のコロナが、今も尙夢の様に霞んで居る。(『生』1937. 7. 4)

(各觀測隊の仕事の記述は、多分別頁にまとめて現はれると思ひます)

三澤勝衛氏逝去さる

本會名譽會員にして太陽黑點觀測に多大の功績を擧げられし三澤勝衛氏は、かねて病氣御靜養中の所、藥石效なく去る8月18日逝去されました。本會は氏の生前の功績を憶ひ、香華を供へて敬弔致しました。此處に會員諸氏に報告し、謹しみて深く哀悼の意を表します。



觀 象 偶 成

半 夜 緣 明 玉。	看 々 興 趣 加。
地 維 南 北 失。	天 漢 向 西 斜。
列 宿 形 千 態。	群 星 色 萬 差。
何 時 惟 就 寐。	不 識 入 朝 霞。
供 一 槃	

神戸關守畔 改 發 香 場